

中1ギャップへの対応に関する研究

～児童への授業実践と小・中学校教員の合同研修を通して～

新地町立新地小学校 教諭 遠藤 寛之

1 研究の趣旨

福島県教育委員会は、「福島県の暴力行為、いじめ、不登校、中途退学調査結果について」(2013)の中で、いわゆる「中1ギャップ※」の解消を本県の課題の一つにあげている。また、県内の小・中学校においても校種間接続期の児童生徒の不応問題解決に向けて様々な取組が行われているが、顕著な改善は見られていないのが実状である。

本来、環境の変化に伴う物理的・心理的ギャップは人生において多々存在しており、その存在そのものをなくすことは難しい。そのような視点に立った時、小学校から中学校へと環境が大きく変化する中で生じる様々なギャップを周りの大人が憂え、忌避しようとするだけでは、児童生徒の成長にはつながりにくい。加えて、小・中学校教員に「9年間で児童生徒の発達をつなぐ」という視点が十分に共有されなければ、ギャップを乗り越えるための力を系統的に児童生徒に体得させることも難しい。

そこで本研究では、「中1ギャップ」を児童生徒の成長の機会ととらえ、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせるとともに、小・中学校教員の連携に対する意識の深化を図ることでこの課題へ対応していきたいと考え、以下に述べるような仮説を設定し、研究を進めることとした。

※ 中学校進学という環境の変化に伴い、生徒の不安やストレスが問題行動となって多く発現すること。

児童生徒が新たな環境に適応するために必要な「ギャップに備える力」を明らかにした上で、それらをもつための授業を実践するとともに、ねらいを明確にした小・中学校教員の合同研修を行えば、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせることができ、小・中学校教員の連携に対する意識の深化も図られるであろう。

2 研究の概要

(1) 「ギャップに備える力」の明確化

① 先行研究の調査

② 児童・生徒・教員の意識調査

- 小学校6学年児童対象の「中学校進学についてのアンケート」
- 中学校1学年生徒対象の「中学校入学後のアンケート」
- 小・中学校教員対象のアンケート

③ 「ギャップに備える力」の設定

- 上記①②の結果から、友だちとよりよい関係を築くことができる「友だちと関わる力」と、自分自身を大切にすることができる「自己肯定感」を、本研究における「ギャップに備える力」と位置付けた。

(2) 「ギャップに備える力」を身に付けさせるための授業実践

① 「友だちと関わる力」を高めるための授業実践

② 「自己肯定感」を高めるための授業実践

(3) 小・中学校教員対象の合同研修

- 小・中学校教員の連携に対する意識を高めるための合同研修会の実施

3 成果と今後の課題

(1) 成果

① 「友だちと関わる力」を高めるための授業実践後、友だちと関わることの大切さや難しさに改めて気付く児童の姿が見られるようになった。また、小学校6学年児童の、中学校進学後の友だち関係に不安を感じている割合が、授業実践前より減少した。

② 「自己肯定感」を高めるための授業実践後、「自分を大切にしたいと思う」という意識が授業直後に高まったことが確認できた。

③ 「小・中学校教員対象の合同研修」の実施後、研修の有効性と小・中学校教員の連携に対する意識の高まりを確認することができた。

(2) 今後の課題

授業直後に高まった児童の意識が事後調査段階では低下していたことから、今後も継続的に「友だちと関わる力」と「自己肯定感」を高めるための実践を行い、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせていきたい。また、小・中学校教員の連携への意識をさらに高めるためにも、研修や交流する機会が設定されるように働きかけていきたい。